

新春を迎えて

波多野 文雄

新年おめでとうございます。ここ岩手富士山麓の、南部アカマツの美林にとりかこまれた東北林木育種場は、昭和33年に設立されて以来、着々と内容の充実をみながら、今年で15年目の新春を迎えることができました。創設当時植えられた300種類近くの内外樹種が、すくすくと伸びて見事な樹木園となり、アカマツやカラマツの採種穂園なども、年とともに年輪を加えながら、それぞれに機能を高めて参りました。新しい年を迎えて、関係諸機関のご協力を得ながら、本年はより一層充実した研究と、技術の錬磨に精を出して参りたいと存じます。何とぞよろしく願いいたします。

年のはじめとなれば、先ず過去をふり返り、それから一年の計を立てるのが順序ですが、過ぎ来し一年をふり返ってみますと、札幌オリンピックに明け、総選挙でしめくくった1972年は、政治、経済、外交、スポーツなど、あらゆる面でまことに多彩な一年でありました。

経済の発展に伴って、日本列島改造論が盛んに論議され、併行して、自然保護、国土保全などの世論も高まり、森林への関心が一段と強くなったのも昨年の著しい特徴の一つでしょう。2月には林野庁から「新しい森林施業」が発表され、9月には林政審議会国有林野部会の中間報告が行なわれ、国有林の進む方向が明らかにされました。また、森林が果たす公益的機能が一年間で12兆8,200億円に相当することが林野庁から発表されました。我が国の農業の年間総生産額4兆6,000億円と比較してみても森林の存在が如何に大切であるかがわかります。さて、昨年は中国との復交、パンダブームでわきかえりましたが、我が国から日

本を代表するサクラとカラマツが中国へ贈られたことも歴史に残る快挙であり、第2のポトマック河畔が北京に出現することでしょう。昨年の林業界もまた、まことに多彩な一年であったと言わねばなりません。

ところで、そのなかでも、夏から秋にかけての木材価格の変動は、新聞記事を賑わせたもの一つでしょう。昭和45年の倒産騒ぎ以来、不況に泣いた木材界にとっては、乾天の慈雨であったわけですが、一方、このようなはげしい変動は、消費者を困らせるばかりでなく、代替品の進出のきっかけを与えるおそれのあることを警戒しなければならないでしょう。今回は急騰の原因が一時的なものであったために、間もなく収まりましたが、いずれにせよ、木材が一旦不足すると、土地や水の不足と同じで生活の根底をゆさぶるような影響力を持っていることが立証されました。昭和36年にもこれと同じようなことがありました。

木材の価格は、暴落したり、急騰したりすることなく、諸物価とバランスを保ちながら適正な価格で推移することが望ましいことは言うまでもありません。そのためには、国産材の自給力を強めることだと思います。国産材の自給力を強めるためには生産基盤を整備しなければなりません。そのためには、林道網を充実させ、造林を推進しなければなりません。その造林を推進するにあたって、かなめとなるのが、省力技術と育種であります。

林木育種は、昭和32年に本格的な事業としての発足をみて以来、鋭意優良遺伝子の収集、採種、採穂園の造成が行なわれ、最近では、これらの採

種徳園から、全国で年間2,000kgの種子と、790万本の穂が生産されるようになったとのこと。東北地方についてみますと、年間約300万本の育苗を生産するに至りました。一口に言えばいとも簡単ですが、ここまでこぎつけたことについては、先輩各位のなみなみならぬご努力があり、また、今後育苗の普及ということについては、今一層のPRが必要とされるであります。ともかく、あらゆる努力を払って、昭和60年頃を目途に、年間に用いられるすべての苗木が、すぐれた形質の育苗によってまかなわれるようにしなければなりません。

わが国の米作は、明治以来100年間に、育種と肥培管理で、反当収量を4倍にすることに成功しました。

林木育種は量より質へといわれていますが、量

そのものも7,650万 m^3 という現在の総成長量は、1億数千万 m^3 あるいはそれ以上になるであろう将来の需要量をまかなうには、まだ不じゅうぶんです。またヘクタールあたり80 m^3 というわが国の平均林分蓄積は、西ドイツの126 m^3 、ソ連の152 m^3 、アメリカの91 m^3 と比較しても少ないばかりでなく、世界の利用林の平均蓄積110 m^3 にも達していません。勿論成長量ばかりでなく、形質、耐病虫性、耐寒耐雪性等が今後強く要求されるであります。また最近、緑化樹の需要の増大に対応して、針葉樹ばかりでなく、広葉樹の育種が大きくクローズアップされて参りました。林木育種事業の今後は益々多事多忙と言わねばなりません。新年を迎え、意を新たにして、仕事にとりくんで参りたいと思います。

(東北林木育種場長)

年頭所感 変 遷 と 育 種

山 口 勝 保

はじめて雪の東北で正月を迎える気持は斬新さが格別である。十数年前、奥飛驒で数年間、雪中の新年を経験してから、久しく都会の雑踏とそら音の中で過してきた私にとって宜なるかなである。

近年における高度経済活動のあおりを受けて東北の地も日一日とその様相を異にしているが「果してその変化が人間の幸福にどの程度寄与しているのか、今後与えるであろう影響は如何」と気になるものである。

なるほど、現代社会の大きな変動の中で不動であることは退くことに通じるかも知れない。どの程度、どのような手段でその流れに乗ればより良い幸せが得られるかが問題であろう。

育種という仕事について、昔、僅かながら知識を持っていたが、直接に担当してみて勉強させられることの多いのに驚いている。生育期間の長い林木の遺伝的形質を研究し、より良い品種を追究することは容易ではない。

しかしながら、農業や果樹、畜産などの分野において優れた成果を挙げているのに対して、林木についても可能であるとして、おくれげながら営々として十数年にわたり林木育種が進められて

きた。既に次代検定林その他を通じ精英樹系統の種苗は現実に山に植えられつつあり、在来の種苗が精英樹系統の種苗に置替えられる日もそう遠くないであろう。

このことは、わが国の造林事業史に一時代を画するもので誠に喜ばしく、先輩諸氏並びにこの仕事に従事してきた人々に心から賛辞を送りたい。

一面において、社会情勢の変革に対して現在の育種事業のあり方がふさわしいものかどうか、検討してみる要があるのではないだろうか。

勿論、当初の育種事業計画に対して、実行過程において諸種の変更がなされ、改善は図られているし、生育期間の長い林木に対して早期の結果を求める愚も承知している。

とは言うものの、社会変化に対応して、林業のあり方そのものが検討されている段階で、林木育種のみが現状のままで良いのであろうか。

改めて、林木育種のあり方を見直すことも意義があるのではなからうか。(それがたとえ変更不要の答が出たとしても。)

みちのくの曇天を眺めながらこんなことを考えている最近である。

(奥羽支場長)

豪雪地域に設定した試植検定林

—中間報告—

高橋清太郎
滝口幸男

はじめに

奥羽支場管内における育種目標の一つにスギの耐雪性向上がある。スギの耐雪性向上については抵抗性育種事業としてとりあげ、豪雪地域（平均最高積雪深2.5m以上）と多雪地域（平均最高積雪深1.2~2.5m）に区分し、現在抵抗性個体を選出中であり、スギの雪害抵抗性育種についてはこの分野において解決されるものと思う。

しかし、スギ以外の樹種での雪害抵抗性については豪雪地域に設定した試植検定林があれば、その成績は有力な資料として役立つことになろう。

奥羽支場では昭和36年秋、豪雪地域として有名な山形県月山々系にトウヒ、カラマツ属の試植検定林を設定し、昭和47年にその第3回目の調査を行なったので、調査結果のあらましを報告する。

1. 試植検定林の概要

- (1)位置 山形県東田川郡朝日村大字田麦俣秋田営林局鶴岡営林署管内六十里山国有林70林班か小班
- (2)地況 海拔650m、傾斜10~15° 傾斜方位NW 土壌型B_D、最高積雪深4~5m、初雪11月上旬、消雪5月下旬
- (3)設定前の林況 ブナを主とする天然生広葉樹の伐跡地
- (4)設定年月 昭和36年10月
- (5)樹種、植栽本数、植栽密度、プロット数、表一のとおり。
- (6)面積 2.80ヘクタール

2. 設定の目的と調査の経過

外国産および、日本産樹種で造林樹種として期待されるようなものについて、当场管内、とくに豪雪地域での環境適応性、および特性等を検定し、導入育種母材としての基礎資料をうることを目的とし、植付後の保育は一般造林地と同様に取扱い鶴岡営林署に依頼して施行してきた。なお、これまでに行なった成長調査等の回数は下記のとおりである。

植栽後の活着調査 昭和37年8月9~10日

- | | |
|----------|----------------|
| 第1回成長等調査 | 昭和39年10月27~28日 |
| 第2回 | 昭和41年10月12~13日 |
| 第3回 | 昭和47年10月16~18日 |

3. 調査結果

本試植検定林は表一のとおり、植栽密度試験を兼ねたプロットを設定したもので、植栽密度についてはトウヒ、モミ属についてはha当り2,000本、4,000本、8,000本の3種類とし、カラマツ属についてはha当り1,300本、2,800本、5,300本の3種類、計29プロットを設定したものである。

調査項目は各プロット毎に樹高成長、現存率、雪害状況および調査期間における年平均伸長量等であるが、植栽密度別の比較については現在優劣の差があらわれていないので、このことについての考察はしないこととする。

(1)樹高成長

トウヒ、モミ属においてはントカトウヒ3.26m、ドイツトウヒ3.10m、ヤツガダケトウヒ2.77m、アカエゾマツ2.35m、クロエゾマツ2.23m、ウラジロモミ1.87mの順である。カラマツ属においてはニホンカラマツ5.55mに対しアメリカカラマツは3.90mで1.65mの差がある。

(2)当初の植栽本数に対する現存率

トウヒ、モミ属では、ドイツトウヒ74.3%で比較的安定した経過を示すが、その他のものはかなり低下している。しかしながら、経過年数5年以降は緩慢な低下率を示している。

カラマツ属では、ニホンカラマツ47%、アメリカカラマツ39%となっているが、今後さらに低下の傾向がみられる。

(3)雪害

トウヒ、モミ属では雪圧による倒伏は少ないが植栽木のほとんどが根元曲りとなっており、幹折れもかなり見受けられる。

カラマツ属では雪圧により倒伏を繰返しているものが多く、倒伏したまま立ちあがれな

表一 1 トウヒ、カラマツ属試植検定林の樹高成長現存率一覧表

樹 種 名	産 地	苗 令	植栽密度 (ha当り)	植 栽 本 数	プロッ ト 数	第 1 回 昭39年調査		第 2 回 昭41年調査		第 3 回 昭47年調査	
						樹 高	現存率	樹 高	現存率	樹 高	現存率
シトカトウヒ	北 米	4	2,000	81	1	76	71.4	110	63.3	326	59.0
ド イ ツ ト ウ ヒ	スエーデン	2~4	2,000	243	3	78	91.2	119	87.7	312	72.0
			4,000	507	3	73	94.6	118	93.2	303	79.5
			8,000	648	2	74	90.8	125	88.8	315	71.5
	平 均					75	92.3	120	90.0	310	74.3
ヤツガダケトウヒ	長 野	4	2,000	81	1	76	93.9	112	85.7	296	82.0
		"	4,000	169	1	64	83.7	90	65.3	272	49.0
		"	8,000	324	1	69	85.7	87	71.4	263	57.0
	平 均					70	87.8	96	74.3	277	62.7
ア カ エ ズ マ ツ	北 海 道	6	2,000	81	1	56	93.9	84	75.5	251	53.0
		"	4,000	169	1	62	93.9	91	87.8	218	61.0
		平 均					59	93.9	88	81.6	235
ク ロ エ ズ マ ツ	北 海 道	5	2,000	81	1	55	73.5	81	69.4	217	59.0
		"	4,000	169	1	45	69.4	70	55.1	213	61.0
		"	8,000	324	1	51	79.6	77	67.3	240	51.0
	平 均					50	74.1	76	63.9	223	57.0
ウ ラ ジ ロ モ ミ	長 野	4	2,000	162	2	42	64.3	62	54.0	183	37.0
		"	4,000	338	2	37	60.2	59	36.8	202	24.5
		"	8,000	648	2	39	75.5	54	57.1	176	45.0
	平 均					39	66.7	58	49.3	187	35.5
ニ ホ ン カ ラ マ ツ	長 野	2	1,300	121	1	154	75.5	252	71.4	570	51.0
		"	2,800	256	1	155	91.8	257	89.8	535	55.0
		"	5,300	484	1	166	57.1	277	46.9	560	35.0
	平 均					158	74.8	259	69.4	555	47.0
ア メ リ カ カ ラ マ ツ	北 米	2	1,300	121	1	143	89.2	202	77.6	341	41.0
		"	2,800	256	1	130	81.6	208	67.3	408	41.0
		"	5,300	484	1	136	79.6	210	59.2	422	37.0
	平 均					136	83.7	206	68.0	390	39.7

備考 プロットの大きさ、トウヒ属 $20m \times 20m = 400m^2$ 、カラマツ属 $30m \times 30m = 900m^2$
 プロット当り植栽本数、トウヒ属 $2,000本 \times 9 \times 9 = 81本$ カラマツ属 $1,300本 \times 11 \times 11 = 121本$
 $4,000 \times 13 \times 13 = 169$ $2,800 \times 16 \times 16 = 256$
 $8,000 \times 18 \times 18 = 324$ $5,300 \times 22 \times 22 = 484$

いもの、幹折れしたもの、さらに蔓類がまきつき雪害を一層助長したものがかなり見受けられた。

(4)年平均伸長量(図一1参照)

調査期間における年平均伸長量については36年から41年までの5カ年を前期とし、41年から47年までの6カ年を後期として年平均伸長量を比較すると、トウヒ、モミ属では、前期の伸長量に比較して後期の伸長量が遙かに多く、前期伸長量の約2倍近くになっていることは注目に値する。

ただし、カラマツ属では前期と後期がほとんど同じ伸長量を示し、後期の伸長量はむしろ前期より少なくなっている。

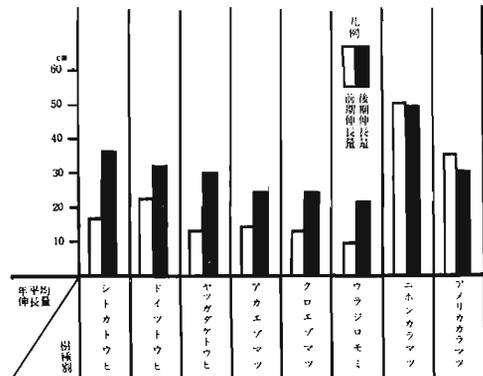
4. 考 察

植栽木の現存率については過去における保育方法にも関連してくるが、現地はススキを主とする大型草木が繁茂し、陽樹のカラマツ属が被圧消滅し、陰樹のトウヒ、モミ属が比較的安泰だったことが現存率にかなりの影響を与えたものと思われる。陰樹と陽樹の関係は年平均伸長量にも関係し、カラマツ属が前期と後期の伸長

量がほとんど同じであるのに対し、トウヒ、モミ属は前期の伸長量を遙かに上廻っている。この傾向は陰樹の特性として今後も持続するものと考えられる、さらに現存率については雪害の因子も加わり、どのように推移するか今後予断を許さないものがある。カラマツ属はトウヒ、モミ属より樹高成長は大きい、雪害による重症被害が多く同一条件下において、トウヒ属の雪害形態とカラマツ属の雪害形態がどのように違うか、更に調査を進める必要がある。

(奥羽支場)

図一 調査期間における年平均伸長量



◆ 現場からの声 ◆

藤 田 哲 郎

関係各位の御指導、御協力のもとに、当署のスキ採種園に対し、昭和46年度から待望久しいジベレリン処理が導入され、本年度から種子生産が始まり、作業員共々大きな喜びと感動を味わいつつ技術の進歩に感心している次第である。

2年間のジベレリン処理結果から、的はずれを覚悟の上で見たまま、感じたままを申し上げますと、1ha当り種子生産量30kg(施業要領による基準量)を得るには、採種木1本当り平均37.5g(30kg÷800本)生産することにより容易に達成することが可能であり、成熟した採種木であれば倍量採取も夢ではない。

採種木の理想樹型については、既に関係機関の研究によりイメージが固まりつつあることと思いますが、樹高については、ジベレリン処理等の管理作業と種子採取作業を、器具使用の範囲内で実行するならば3m以下を望みたい。より以上に土地の生産性とか、採種園の利用効率を高めるならば3m以上の樹高とし、樹冠表面積の増加と種子の増産が可能であるが、散布、せん定等各種管理作業と種子採取をかねた新たな装置を伴った機械の開発が必要となる。

ジベレリン処理については、樹冠維持上、樹冠の分割処理やラセン処理が検討されているようであるが、処理と種子採取の能率上、全面散布のうえ、枝葉量増加と樹勢回復に要する適当な期間を設けられるよう希望する。

種子の結実には、複雑な諸条件があるものと思

いますが、同一条件の下に同じ外観を呈しておきながら着花、結実が少ないか、または、全くないものが見受けられるので、採種木の内的充実度の診断と処方の説明を望むものである。

例えば、採種木の枝葉の1部を分析することにより、何が不足しているか、どれくらい補給すれば足りるか、私達現場担当者でも簡単に処理できる方法が開発されるならば、キメの細かい採種園の管理によって均一な着果と安定的な種子の生産が可能になるものと思われる。

採種園を健全な採種木に仕立てて、遺伝的に優れた充実種子を安価に、安全に、安定的に生産供給する場と考えるならば、当面は肥培管理と下枝の発達した自然型を目指した育成管理に重点をおき、間伐対象木のジベレリン処理を継続実行のうえ、成果を観察し、今後の実行に反映したい。

従来の種子採取に比較して、木登り作業が不要となり、平地での採取であるから作業の安全性は向上した。現状では採種木の樹型が小さく樹冠表面積も少いので、コストも割高であるが、採種木の成熟に伴い未熟果が減少し、樹冠表面積の増大により、充実種子の大量生産とコストダウンが可能となり、安定的計画生産については、ジベレリン処理により達成できるものと確信している。

当署の採種園も昭和40年に第1採種園が造成されて以来、第2、第3と続き、昭和48年度で約6haの採種園が誕生するので、これらの運営については、2ha毎、3団地に区分し、第1団地は処理区第2団地は結実区、第3団地は樹勢回復区とし、1サイクル3年とした種子の計画生産が夢である。

(早口営林署 種苗係長)

東北地方におけるスギさし木事業の実際 (5)

太田 昇

採穂台木の仕立方：高台円筒型仕立の樹型誘導

高台円筒型仕立は前報^{19) 20)}でのべたように台木の高さを1.5~2.0mでおさえて採穂作業を容易にし、さらに各主枝を幹から10cm前後で剪定して樹冠の広がりやせばめ、冠雪害をも防ぐようにした、いわば細長い茶筒のような樹型で鳥取県の山本見氏の先代が考案したものであり、その具体例は田中¹⁴⁾によって紹介されている。

山本見氏の話によれば、先代のおやぢさんは台木1本からできるだけ多く穂をとり、将来・台木を伐倒する時には木材生産も考えていたので台木の高さを10m位にし、ハシゴをつかって採穂していた。言葉をかえると土地の空間を立体的に活用していたといえるが、見氏の代になり採穂園の経営規模が大きくなったこと、ハシゴ作業は非能率的で危険であり、さらに労務事情から女の人でもできるようにする必要があることから、台木の高さを1.5~2.0mにきりかえたということであった。今でも採穂園の一部に10mの台木が残されているが、採穂園と

いうより採穂林といったほうが適切であろう。

田中¹⁴⁾は円筒型仕立の応用型として図-8のような円筒型と円錐型仕立があるといっているが、基本は円筒型仕立であるので以下樹型誘導法をのべる。なお、この仕立方は各主枝を幹から10cm前後のところで剪定して採穂拠点をつくるが、不定芽は主枝を剪定したところばかりでなく、幹と主枝の分枝部や直接幹からも発生するので、すべてさし穂に利用していく。

樹型誘導手順の模式を示したのが図-9である。図でみるように台木が成長するのをまち、下層から毎年数本ずつの主枝を剪定して骨格をつくっていく。前報²¹⁾の低台丸刈仕立では、はじめに幹を台切りし樹高をおさえて骨格をつくっていったが、円筒型仕立では主枝を剪定しながら樹高成長も期待しなければならないので低台とは全く逆の手順になる。したがって剪定する主枝の太さと位置は、低台仕立のそれよりやや太めな3-4年生の枝がよい。すなわち、小指ほどの太さになったものから順次剪定をはじめ、幹の長さ2m内の主枝の剪定がおわる時点になったら幹を台切り(芯ぬぎ)するので、東北地方では台木を植えてから10年目ころに骨格が完成してくる。

円筒型仕立の不定芽は台切りがおわるとでやすくなるので、スギの初期成長が早い地方では誘導手順をかえて樹高が2.5~3mになったら台切りと主枝剪定を一斉に行なってもよいが、初期成長のおそい当地方では、樹高が3m位になると下層の主枝は木化がすすみ、剪定しても不定芽がでにくくなるので模式図の手順で毎年剪定す

図-8 円筒の形態

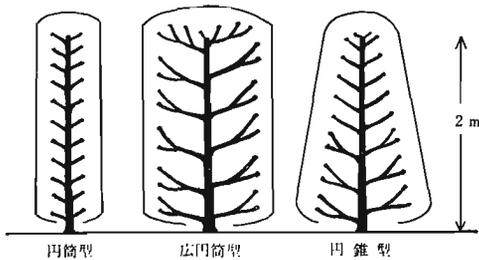


図-9 高台・円筒型仕立の樹型誘導模式図

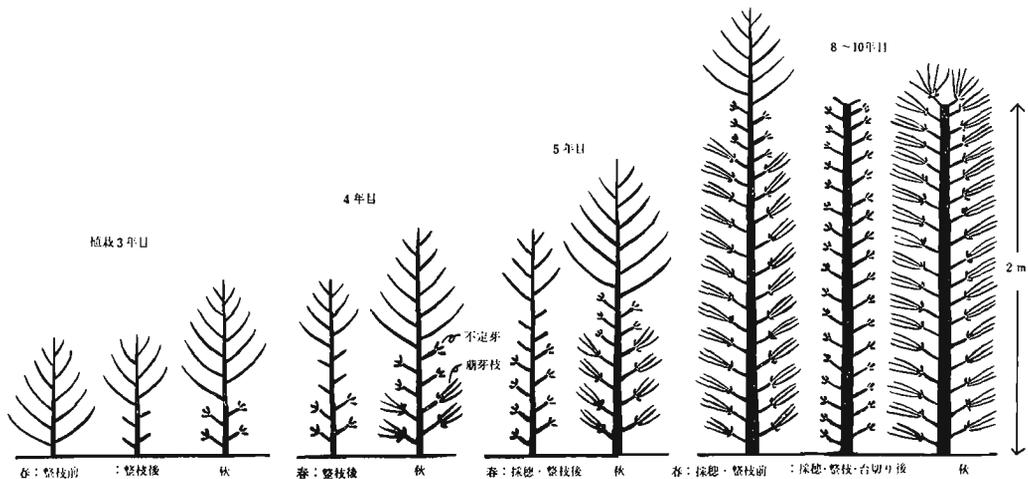
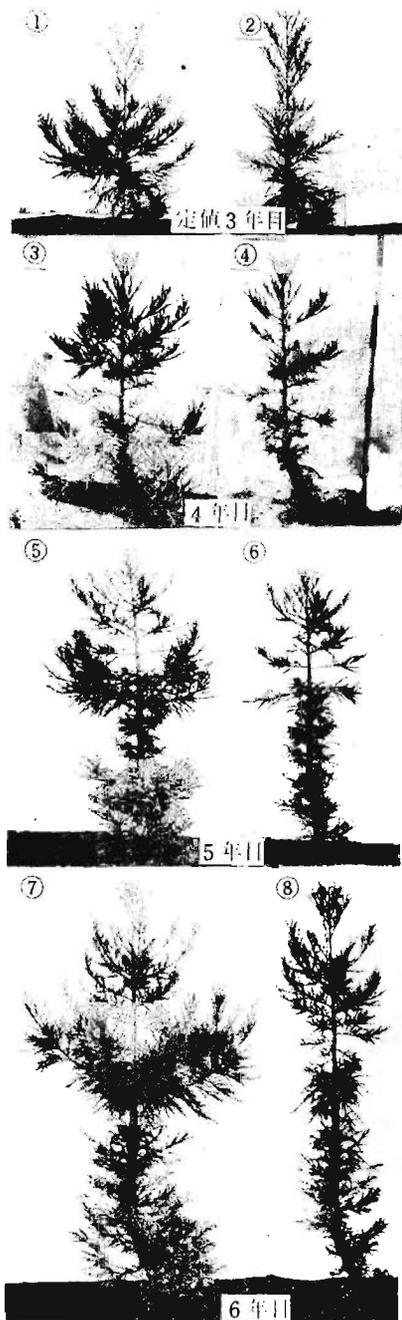


写真-4 円筒型仕立の樹型誘導手順
採穂・整枝前 採穂・整枝後



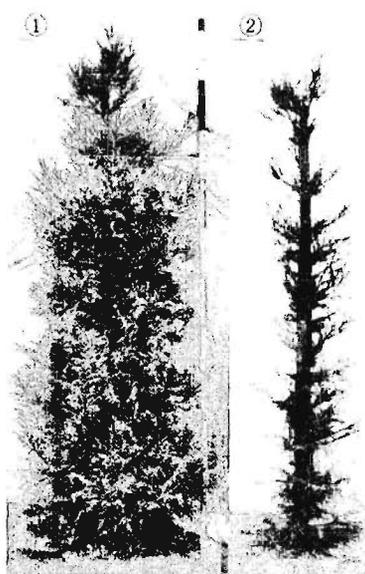
るのがよい。

模式図の手順で誘導した実例が写真-4で、植栽後の経過年次ごとに主枝の剪定とさし穂採取の前・後を示したが、被写体はすべて同一個体で縮尺も同じである。

以下順に解説する。

- ①このように樹勢がつき枝ぶりもよくなったところから主枝剪定をはじめるとよい。樹高1m

写真-5 10年生の円筒型仕立
採穂前 採穂後



- ②主枝7本を剪定した。この台木は地際から3本ほど萌芽枝がでていますが、これは植栽当時からみられた不定芽がのびたものである。

- ③樹高の下半分は枝ぶりがバラバラだが、これは②で剪定しなかった弱小主枝がのびたためである。

このように主枝剪定は着枝層位によって一律に剪除しないで、枝勢のよいものから間引き剪定する。

- ④6本の主枝と地際の萌芽枝(さし穂)を剪定した。

- ⑤2年前はじめて剪定した地上40cmまでのところに

は萌芽枝群が、その上の前年剪定したところには不定芽群が、さらにその上には未剪定の主枝群とがあって3段の型になっているが、これは円筒型仕立の未完成時代にみられる形態的特徴といえる。

- ⑥7本の主枝と15本の萌芽枝を剪定した。

- ⑦樹高は2mになり幹も太くなって萌芽枝もかなりとれるようになってきた。

- ⑧7本の主枝と27本の萌芽枝を剪定した。

このように主枝を剪定してあたらしい採穂拠点をつくる一方、ふるい採穂拠点の萌芽枝はさし穂として利用しながら樹型をつくりあげ、樹高が2.5~3mになったところに1.5~2mで台切りして完成させる。

植栽後10年を経た完成期の台木の採穂前後を示したのが写真-5である。

- ①台木の高さ2m・幹の根元直径10cm・クローネ直径は70cmである。みえる枝はほとんどが萌芽枝であり一応完成したものと見えよう。

このような台木になると、かなり積雪の多い地方でも平坦地であれば雪害の心配はなくなるが、この大きさになるまでは幹が倒れないよう雪害防除が必要である。

- ②65本の萌芽枝を剪定した。また下層のふるい拠点を間引きした。

みるからに淋しい骨ばかりになったが、翌春には立派にさし穂がとれるようになる。

採穂拠点数があまり多すぎると萌芽枝がムレたり、折角でた不定芽が濡れたりするので、適当に拠点を間引いて通風をよくしてやることや、拠点間に堆積した

枯れ葉・クモの巣などを取り除いてやるのが大切である。(つづく)

引用文献

19) 太田 昇：東北地方におけるスギさし木事業の実際(2)，東北の林木育種，No 34，1971. 7.
 20) ———：東北地方におけるスギさし木事業の実際

(3)，東北の林木育種，No 37，1972. 1.
 14) 田中 周：林木育種の生産技術，採穂園，地球出版，昭42.
 21) 太田 昇：東北地方におけるスギさし木事業の実際(4)，東北の林木育種，No41，1972. 9.
 (東北林木育種場・原種係長)

○東北の林木育種昭和47年(1972)総目次○

No. 37 (1月)

新年にあたって……………梅本昌一… 1
 捨てるということ……………水田輝弥… 2
 支持根の山……………2
 東北地方におけるスギさし木
 事業の実際(3)……………太田 昇… 3
 スギ採穂台木の肥培・地表管理試験
 ……………佐藤文男… 6

No. 38 (3月)

全国植樹祭と林木育種事業……………新潟県治山課… 1
 抵抗性育種事業実施細則の
 改訂について……………東北林木育種場… 3
 抵抗性個体の選抜現況……………5
 精英樹系種苗の生産状況……………7

No. 39 (5月)

スギ採種園について……………三嶋久志… 1
 ジベレリン処理の要領……………奥羽支場… 5

No. 40 (7月)

流行と林木育種……………梅本昌一… 1
 林木育種も試験研究である……………島陸奥男… 2
 林木育種事業あれこれ……………和久井光雄… 3
 育種苗実用化のための
 展示林設置の必要性……………斎藤錦也… 4
 育種研修のあり方……………水田輝弥… 5
 水……………鈴木佑一… 6
 林木育種事業に期待する……………駒林広一… 7
 穂作り……………武田英文… 8

No. 41 (9月)

青森局管内の造林と育種苗……………棟方啓爾… 1
 秋田局管内のスギ種子の
 需給の現状……………佐藤好矢… 2
 前橋局管内の種子の現状……………鎌塚修次… 3
 東北地方におけるスギさし木
 事業の実際(4)……………太田 昇… 4

クロマツ海岸保安林の虫害と
 抵抗性……………土屋辰雄… 6
 林木育種協議会便り……………8
 No. 42 (11月)
 カラマツ精英樹の病・虫害に
 対する抵抗性……………太田 昇… 1
 青森県の林業用種子の現状……………阿部行夫… 3
 宮城県造林と育種々苗生産の
 現状について……………三嶋久志… 4
 山形県の種子の需給……………鈴木佑一… 6
 岩手県における優良種苗の確保
 事業について……………甘竹 需… 7

編集後記

明けましておめでとうございます。
 読者の各位にはよい正月を迎えられ、心からお喜び申し上げます。本年もよろしく、ご支援、ご協力をお願いする次第です。
 読者の各位は既に読んでおられると思いますが、**林業技術 No. 369 (1972. 12) こだま (39P) ほんといにあるかもしれない話 (唯香車)**、その概要は「林木育種の専門家が動員されて、品種改良を重ねた結果、大気汚染に絶対強い樹木を作り出した。この樹木は成長が早く繁殖力旺盛で手入れも簡単で、すばらしい品種なので、われわれもこの苗木に飛びついた。
 やっと苗木を確保したK市もこの品種で見事に緑化して一安心したが、緑化が完成したからといって公害がなくなったわけではなかった。公害病認定者の死亡も増加をつづけ、人々は街から逃げ出しはじめ、工場もその人員確保が困難となり、つぎつぎと閉鎖され、こうしてゴースタウンとなった街には、いまやその品種ネリウムスモック4号だけが見事に栄え濃緑の葉と紅色の花が衰えを知らずに一杯溢れていた。」
 考えさせられる記事でした。
 日本列島改造が提唱される今日、各所で緑化樹木の生産が盛んに行なわれています。林木育種事業も公害に強い樹苗の選抜、改良が要求されることでしょうか……。

昭和48年1月1日発行
 編集 東北林木育種場
 岩手県岩手郡滝沢村滝沢
 TEL019688(滝沢駅前局)―4517
 印刷所 杜 陵 印 刷